

# 国際京都学だより

第9号 二〇〇九年（平成二十一年）三月十日（火）

## 嵯峨祭りへの誘い

吉田 五彦（写真家）

「嵯峨祭り」は、五百年にも及ぶ長い歴史の中で、幾多の動乱・災害に依る中断と復活を繰返し乍らも、時代の文化を帯びつつ、嵯峨の人々が大切に守り育ててきた「里の祭」です。

平成二年〜三年、白小袖に水浅葱の袴・袴、白足袋に草履・菅の一字笠、腰には白扇を手挟んで還幸祭に供奉致しました。御旅所での式典の間、拝殿の板敷で正座を強いられ、難渋した記憶が懐かしく思い出されます。

還幸祭巡行列の構成は、愛宕社と野宮社の神輿二基を中核に、先立つ剣鉾は菊・龍・牡丹・麒麟・沢潟の五基、赤と青の獅子二組、雅楽車、太鼓、神官、嵯峨地区内の自治会長の随伴車、献酒車、子供神輿（別ルート）、稚児行列（復路のみ）。以上が、嵯峨地区内を約七・五キロに及び巡行します。五月の第四日



曜日は是非とも嵯峨に足を運んでください。午後三時頃には、嵐山の渡月橋北詰で行列に出合す筈です。ここには、大堰川の川守であると謂う大井神社なる小さな祠があり、神輿

もこの社前を過ぎる時は、御挨拶の意図か「ホイット・ホイット」の掛け声も、「ワッショ」「ワッショイ」と昂ぶり、豪勢に練り廻され、差し上げられ、最高潮に達します。

神輿が盛大な観衆の喝采を浴びている頃、五基の剣鉾は「小督塚」に差掛かり、鉾差しの力強い歩みに「チイン・チャリン」と鈴を響かせ、周囲の邪気を祓いつつ、気品高く厳粛に歩を進めます。私の最も好きなシーンです。渡月橋の端正な姿、折からの若葉萌える嵐山を背景に、五基の鉾が色とりどりの吹散を誇らしげに川風に孕ませて並び征く様は、将に動く大和絵です。時折り、鉾の剣先が五月の陽光を受け「キラッ・ピカッ」と眩しく煌き、吹散の縫取りの紋に照り映える。威風堂々の剣鉾五基は、少しずつ音色の異なる鈴の五重奏と和し、山も水も緑一色に染まった翠嵐に溶け込んで逝く。

「嵯峨祭」を終ると、嵐山の春も幕を降ろすことになる。

補記 嵯峨祭の詳細については、本協会会員・古川修氏の著書『嵯峨祭の歩み その歴史・構造・変遷』京都新聞出版センター、二〇〇八年五月刊があります。

編集：国際京都学協会事務局

〒604-8383 京都市中京区西ノ京小堀町二五三

ホームページ <http://www.kyotogaku.org/>

Eメール [info@kyotogaku.org](mailto:info@kyotogaku.org)

発行：国際京都学協会

題字は書家・杭追柏樹（くいせこはくじゆ）氏

## 第10回国際京都学体系研究会

### 書の世界からみる紫式部の美意識

杭 迫 柏 樹(日展理事・書家)

日本の書道の主流は京都の書であり、その源流が『源氏物語』の中にすでにあったと思います。奈良時代の書は中国の垂流で、写経は中国の北魏のスタイルをそのまま取っています。日本の書は空海からで、直線で書いた字は苦手で草書が素晴らしい。中国では草書のように曲線が入り文字が装飾的になることに価値を置きません。草書に価値を与えたことが仮名を生み出す基になり、仮名が生まれ、文字が自由に書けるようになって素晴らしい文学が次々に生まれました。本当に不思議なことで、私は、美しい仮名を生み出したのは女性の力で、男はそこまで飛躍できなかったと考えています。女性の持つ美意識で、大胆に、簡単に美しい文字を作ったと私は想像しています。

平安時代には小野道風、藤原佐理、藤原行成の三蹟が有名ですが、『源氏物語』の中では道風などは古臭くて面白くない、魅力がない、行成こそいい書の本だと記されています。行成の書を、白楽天の詩を書いた『白居易詩卷』でみると「寛仁二年八月廿一日書之以経師筆」は安物の写経生の筆で書いたので、「点画失所」つまり思うように点画がいかなかった。「来者不可笑」後世の人は、行成を下手な人だったと言わなれ、と言いついてるところが面白い。伸び伸び、くつろいだ書で行成の最高傑作です。壬生忠岑の歌を書いた『寸松庵色紙』は伝紀貫之筆となつていますがそのはずはない。古筆で伝というのは偽と同じで、全部男ですが、仮名は女性が書いたのではないのでしょうか。

『源氏物語』の中で書に触れている箇所をいくつか紹介してみましよう(谷崎訳)。

「まして人の心の値打ちを定めますには、当座の思わせぶりだとか、上つ面の愛嬌などを頼りにしてはならないと思います。」(帚木)という箇所では、素人の自己流で器用書きの書というものがありますが、下手でもしっかりと書いたほうがまだいいと言っています。書を見て人物をはかると言いますが、書というものもセンスや器用さにまかせず、たゆまぬ古典の追究から生まれる真実の美こそ尊いものと説いています。

「筆を用いる」と碁を打つことのみは、不思議に天分のほどが現れるも

ので……(総合)からは、芸術を志す人達の永遠のため息が聞こえます。

「天才というものは無い。ただあるものは不断の努力だけ」というロダンの言葉に私も励まされています。

「偉そうに漢字の草体を交ぜたりして学者ぶった真似もせず、やさしく書き散らしてあります。」(初音)という箇所からは、漢詩など知らない素振りや学識をおさえていた紫式部にとって、御簾をあげて「香炉峰の雪いかならむ」といった清少納言が、最も嫌いなタイプの人間だったことが明確に表現されています。

『源氏物語』に見る書美の理想をみますと、まず「上品で気高く」(賢木)といっています。さらに「何事につけても、昔よりは浅はかに、劣るようになって行く末世の今ですが、仮名だけは当節の方がこの上もなく巧くなりました。古人の筆の蹟は……(梅枝)という箇所は、三蹟のなかでも道風等は古臭く、行成こそが素晴らしいということです。「無雑作の草仮名の歌を筆にまかせて、乱れ書きになさいましたのは限りない面白さがあります」というのは散らし書きを指しており、『継色紙』(伝小野道風筆)『升色紙』(伝藤原行成筆)『寸松庵色紙』の三色紙もすべて散らし書きです。

「墨つきの輝かしさは眼も及ばず」(若菜上)というのは日本独特の書の褒め言葉で、墨の調子とか、墨色の美しさを指しています。鳥の子紙に墨の光沢がにっ立つように出てくる。墨色の変化というものが、初めて美意識として認められたもので、中国ではこういう評価はありません。

「今めかしう、をかしげに目も輝くまで見ゆ」(総合)は、「現代的で目を見張る、まぶしいほど美しい」とでも訳すのでしょうか。こうした言葉は、書の美しさと人物評定が表裏一体になっており、日本ではすべての芸が「芸道」に走っていくのですが、もうすでにここに素地があつたのかと思います。

日本美とは何かといいますと、書においては「抒情の系譜」だと思つてです。藤原公任の「和歌は心深くして詞余れる情あるべし」という言葉は、そのまま書にも置き換えられます。日本では書道といいますが中国では書法と言います、どこまでも法であつて理的なとらえ方です。中国の書は非常に論理的で、直線構成のものがうまう、日本でうまいのは仮名と草書です。これは抒情の伝統であり、心深くして余れる情というのは自然にできるのだと思います。

書の美とはなにかを考えると、作家自身の「自分とは何か」を内側から迫及することではないでしょうか。書の勉強は「自分探しの旅」であるというのが私の結論で、『源氏物語』を読んで先人たちの言葉を大いに参考にしたいと思つています。

## 第11回国際京都学体系研究会 教会にはなぜ庭がないのか―宗教と庭園

白幡 洋三郎(国際日本文化研究センター教授)

「何有荘」という池泉回遊式庭園の傑作を背景にして話をするというのはありがたいことだ。ここは南禅寺正因庵の塔頭だったものが明治維新後に売却され、染色分野の実業家で映画の興行でも有名な稲畑勝太郎氏が所有した時期に「和楽庵」と名付けられ、戦後には宝酒造の大宮庫吉氏の手に渡り、今のように改名された経緯がある。

私の庭園研究とのかかわりは、都市計画史の勉強にドイツへ留学し、都市計画における公園緑地の重要性に目を開かれたことにさかのぼる。大学の造園科の学生の頃は日本庭園の説明に論理性がないこととまどっていった。外国人に説明を求められ日本の庭の研究に入り、その奥深い価値に気づき、東西の比較という立場につながった。

「京の庭園、奈良の仏像」と言われる。奈良の寺に行く楽しみは日光・月光菩薩など仏像の見学で、庭園を目的の人は少ない。奈良時代の仏教は基本的に鎮護国家の仏教であり、国の安泰・安寧の確保を理論づけることにあつた。「都市・平地仏教」で、南大門、講堂、金堂などの伽藍様式をとり、学問をする講堂が大事。経典の学問をするエリート集団の学問僧がいる場所が寺院であつた。いっぽう、桓武天皇は平安京遷都の際、仏教の影響を政治から遠ざけるため、国家公認の官寺を東寺と西寺の二つにかぎつた。当時、国家の保護をうけていた僧侶のほかプライベートに仏教に帰依する私度僧があつた。私度僧たちは宗教的な実践のため浄瑠璃寺周辺の洞窟



窟のように、都市周辺の山麓の洞窟や庵で個人の救済の修行をおこなつた。つまり平安京では「山林・修行仏教」の性格を帯びた。周囲にある環境をもとにした宗教的な修行の空間が、今の寺の庭園の基になつており、その中でおそらく枯山水の様式が生まれたのだろう。

日本には「別荘から寺院へ」つまり世俗施設が宗教施設へと変化した流れがある。平安期の二大別荘地の一つは嵯峨野であり、もう一つは宇治

だつた。平等院は藤原道長の別荘「宇治殿」だつたものをその子の藤原頼通が寄進し寺院にあらためた。天竜寺は龜山天皇の別荘「龜山殿」だつたが、足利尊氏が後醍醐天皇の冥福を祈り鎮魂のために、天竜寺として整備したものだ。平安時代中期、慶滋保胤の『池亭記』に邸宅の庭に持仏堂を設けたとされるように、邸宅が宗教寺院化したわけだ。建築史上、寺院建築というが、住宅とほとんど変わりがなく流用ができる。

庭園と東西の宗教を考えると、仏教が定着してゆく中で、宗教施設に庭園が増えてきたのが、日本の仏教、日本の文化の特徴だと思う。日本では石や木も神になるし、庭園というのはほとんど宗教施設であり、神、仏の至現するような装置であつた。

西洋世界では世俗の方でしか庭園は作らなかつた。それが教会に寄進されるということもまತ್ತくなくあつた。ヨーロッパの教会では庭園を作らなかつた。キリスト教の修道院には敷地内部にパラダイスなどの空間があるが、裝飾のない緑の芝生の空間にすぎない。教会の内部にはステンドグラスの美しい空間があるが、外部は非常に簡素である。修道院には生活のための実用園があるのみである。

ベルサイユ宮殿やウィーンのシェーンブルン宮殿など、有名な庭はほぼ全て宮殿の庭であり、つまり世俗の庭であつた。世俗の庭をよく見ると彫刻が飾つてある。面白いことに、ほとんどがギリシャ・ローマ神話にもとづく女神や春夏秋冬の神々、狩猟対象のイノシシや鹿などの動物、ヨーロッパ、アジア、アフリカなどの大陸を象徴するシンボルなどで、完全に世俗の世界としての空間だつた。

鎌倉、室町、桃山と時代が下がり江戸期には宗教施設の世俗化がおこつた。お寺の参詣は庭を見に行くことでもあり、庭園が参詣と遊山の受け皿になつてゆく。寛政の『都林泉名勝図会』には美しい庭や遊興施設の紹介があるが、その典型例が円山をみると時宗の坊が立ちならんでいるが、今に残るのは左阿弥という料亭だけである。

「教会にはなぜ庭がないのか」を考えると、ヨーロッパでは庭園という一種の自然を教会などの宗教施設の中に置かない。日本の庭園には平安期以降の日本仏教的な背景があり、日常化された宗教的な感性が、日本人の庭を育てているようだ。わたしが若いときに日本庭園の理解が難しかったのは、自然に宗教的な雰囲気を持つていたからだつた。

## 国際京都学協会 第16回文化交流サロン(講演)

### 京・文化と経済

#### 山田 浩之(京都大学名誉教授)

「京都まちづくり研究会」を今年からはじめていますが、ここでは文化経済学の視点から、京都の文化と経済の諸問題、ミュージアム、大学などについて考察してみたい。文化と経済の関係は、一般には水と油のように相反するものと思われている。文化を代表する芸術、学術、宗教などは崇高な精神的営みであるのに対し、経済は金儲けではないか、俗なものではないかという通念があるようだ。しかし、現実の経済の中でも福祉、医療、環境などに携わっている非営利活動が重要な役割を果たしている。

現代社会では文化と経済は相互に依存する関係に入っており、文化経済学が経済学の最も新しい分野として成立した。そこでいう「文化」は文化人類学の定義とは異なり、生活の質を高めるもの、梅棹忠夫先生の言葉を借りると「心の足しになるもの」といった価値と関係があるものを指す。「文化的価値」を正面から取り上げたのはオーストラリアの文化経済学者D・スロビーで、文化的価値と経済の関係の研究を唱えた。文化的価値を有する財の需要供給を研究するのであるが、文化というものは通常の市場経済の原理だけでは運用は難しく、どうしても「文化支援」が必要になってくる。

これはW・J・ボーモルの指摘したボーモル病に関係がある。たとえばクラシックの弦楽四重奏などは、昔から同じかたちでやってきたが、人件費は上昇するにつれて入場料をあげるわけにはいかない。つまり文化の部門では生産性の上昇はなく、必然的に赤字が発生するというものである。何らかのかたちで文化支援が必要であり、昔は王や貴族がパトロンとなって文化を育てていたが、今は国や地方自治体に財団などが支援していかねばならない。そういうシステムを考えるのも文化経済学の課題だ。

地域づくりやまちづくりとか都市再生などにも文化が非常に重要になってくる。一九六〇年代から七〇年代にアメリカ合衆国やイギリスの大都市に行ったことがあるが、街は汚れて荒廃し、歩くと危険だと注意されたり、財政は破産状態という都市衰退の現象に見舞われていた。一九八〇年代に入って、ニューヨークを筆頭にアーバン・ルネッサンスの動きがおこり、ミュージアムなどの文化施設を立派にするなど文化による再生をはかる

ことで見違えるような成功をおさめ、往時とは様変わりをしている。

文化経済学の目で京都の文化政策を見ると、まず戦後五年たつて一九五〇年に京都国際文化観光都市建設法が制定され、文化観光が理念として浮かび上がった。七八年の世界文化自由都市宣言も重要な意義がある。「都市は理想を必要とする……」という名文からなっており、まちづくりの理念として今日まで受け継がれており、一九九九年に作成された京都基本構想につながっている。二〇〇六年には京都文化芸術都市創生条例が制定され、文化芸術都市づくりの基本理念が練られてきた。

一九五〇年に京都市立美術大学が、五二年には京都市立音楽短大が開学し、後に合併して市立芸術大学が発足した。クラシック音楽に関しては、一九五六年の京都市交響楽団は全国で最初の自治体丸抱えの交響楽団であった。一九六〇年に建設された京都美術館が老朽化したあと、九五年に新しい京都コンサートホールも完成している。

ミュージアム関係では一九八二年に歴史資料館が設立されたが、残念ながら本格的な歴史博物館の建設には及んでいない。都心部の小学校跡地利用により京都国際マンガミュージアム、京都芸術センターや学校歴史博物館などの建設が実現している。学術関係としては、一九八七年に国際日本文化研究センターが開設された。九三年には大学のまち・京都21プランが生みだされ、九八年に大学コンソーシアム京都が発足した。これは全国で最初とはいえないが市全体の大学が参加するような規模としてはいちばんであり、キャンパスプラザの利用もさかんにおこなわれている。私大の立命館大学や京都精華大学、京都造形芸術大学なども重要な活動の拠点となっている。

#### 芳賀理事長に京都市文化賞・特別功労賞

平成二十一年一月、当協会の芳賀徹理事長が、第二七回京都市文化賞の特別功労賞を受賞されました。京都の文化の振興、発展に功績のあった人に贈られるもので、今回はノーベル物理学賞を受賞した益川敏英・京都産業大学教授や千玄室・前裏千家家元、作曲家・京都市立芸術大学名誉教授広瀬亮平氏(故人)と同時の受賞となった。

比較文学・比較文化史の研究と幅広い芸術評論においてあげた顕著な業績や、「源氏物語千年紀」のよびかけ人、また千年紀委員会委員・企画部長として記念事業の企画、実施に中心的役割を勤め文化の昂揚に示した多大の功労が評されました。

(原稿はすべて事務局で責任編集しました。)